

### 卷第三 述溫病風溫

溫病者、熱結在裏、表裏俱熱證、是也、即陽明病之一證、

溫病とは、熱結裏に在り、表裏俱に熱證、是也、即ち陽明病の一證、

此病、前注爲内經溫病之義、間有謂爲白虎證者、猶與彼強合、特王氏柯氏以爲傷寒中之一證、惜辨微不覈、今因演其說曰、内經所謂溫病者、冬傷於寒、寒邪内伏、得春溫而方發之謂也、本經三陽三陰、及中風傷寒等、其名取之素難、而其證則自異、豈特至溫病、既取其名、又併其證而取之乎、況全經本不有「時分病之說」、則仲景所謂溫病、爲傷寒中之一證、明矣、且攷素問瘧論、以「先熱後寒」爲「溫瘧」、而仲景則以「身無寒但熱」爲「溫瘧」、以「其有骨節疼煩」、故加桂枝於白虎湯中、以清裏發表、可見溫病之溫、與「溫瘧之溫」、均是熱盛之謂矣、溫熱互稱、猶冷與寒、素問、春必溫病、靈樞論疾診尺篇、作「春必生瘧熱」、太素、作「春乃病熱」、又評熱病論、其首節、說「病溫陰陽交」、而倉公傳則曰、熱病陰陽交者死、又刺熱病有「五十九穴」、而叔和則曰、治「溫病」刺「五十九穴」、許氏說文曰、熱、溫也、並可「以徵」焉、此條冒頭三字、蓋揭「示來路」者、曰「渴」、曰「不惡寒」、俱表解而裏熱之候、則發熱、其初太陽翕翕之熱、而今爲「陽明蒸蒸之熱」、然則與「熱結在裏表裏俱熱」、有何差別、愚故以爲溫病即白虎證之稱謂也、

此病、前<sup>以前</sup>の注は内經溫病の義と爲す、間<sup>間</sup>・このごろ謂<sup>おも</sup>うに白虎證を爲す者、猶彼と強く合<sup>あ</sup>うがごときもの有り、特に王氏柯氏以て傷寒中の一證と爲す、惜しむらくは辨<sup>あきら</sup>かにする<sup>徴</sup>しるしを覈<sup>カク</sup>・たしかめる<sup>せず</sup>、今因つて説を演<sup>の</sup>べて曰く、内經謂う所の溫病は、冬に寒に傷<sup>やぶ</sup>れて、寒邪内伏、春に溫を得て方<sup>ま</sup>さに發するの謂也、本經<sup>傷寒論</sup>の三陽三陰、及び中風傷寒等、其名之を素<sup>素問</sup>難<sup>難經</sup>に取れども、其證則ち自ら異なる、豈溫病に至りて、既<sup>ことごと</sup>く其名を取り、又其證を併<sup>あ</sup>わせて之を取らん乎や、況<sup>い</sup>わんや全經<sup>完全なる聖人の書</sup>本元、時に従い病を分けるの説有らざれば、則ち仲景は謂う所の溫病を、傷寒中の一證と爲すは、明らか矣、且つ素問瘧論を攷するに、先熱後寒を以て溫瘧と爲せども、仲景<sup>\*</sup>は則ち身寒無く但熱するを以て溫瘧と爲し、其骨節疼煩有るを以てす、故に桂枝を白虎湯中に加え、以て裏を清し表を發す、見るべし溫病の溫と、溫瘧の溫と、均<sup>ひと</sup>しく是熱盛の謂い矣、溫熱互<sup>かわるがわる</sup>稱、猶冷と寒のごとし、素問<sup>生氣通天論・陰陽應象大論</sup>、春必溫病、靈樞論疾診尺篇、春必ず瘧熱を生ずると作<sup>な</sup>す、太素<sup>楊上善「黄帝内經太素」唐</sup>、春に乃<sup>す</sup>なわち熱を病むと作<sup>な</sup>す、又評熱病論<sup>素問</sup>、其首節<sup>「黄帝問曰、有病温者・・・岐伯曰、病名陰陽交、交者死也・・・」</sup>、病溫陰陽交を説く、而して<sup>司馬遷「史記」前漢</sup>倉公傳則ち曰く、熱病陰陽交わる者は死す、又熱病を刺すに五十九穴有りと、而して叔和則ち曰く、\*\*溫病治するに五十九穴を刺すと、許氏說文<sup>許慎「說文解字」後漢</sup>曰く、熱、溫也、並<sup>み</sup>な以て徴とすべし焉、此條<sup>\*</sup><sup>\*</sup><sup>\*</sup>冒頭三字<sup>太陽病</sup>、蓋し來路を揭示する者、曰く「渴」曰く「不惡寒」、俱に表解して裏熱の候なれば、則ち發熱、其初太陽翕翕<sup>キュウキュウ・火にあぶられるごとく全身の表面があつくなる・太陽上桂枝湯の條「傷寒論入門」</sup>の熱にして、今陽明<sup>\*</sup><sup>\*</sup><sup>\*</sup><sup>\*</sup>蒸蒸<sup>体内から蒸し立てられるが如く感ずる熱「傷寒論入門」</sup>の熱を爲す、然れば則ち熱結が裏に在り表裏俱に熱すると、何ぞ差別有る、愚故に

以て溫病即ち白虎證の稱謂ショウウイ・よびかたと爲す也、

\* 金匱瘧病「溫瘧者、其脈如平、身無寒但熱、骨節疼痛、時嘔、白虎加桂枝湯主之、」

\*\* 傷寒例二十一條「凡治溫病 可刺五十九穴」

\*\*\* 太陽病上六條「太陽病 發熱而渴 不惡寒者 為溫病 若發汗已 身灼熱者 名風溫 風溫為病 脈陰陽俱浮 自汗出 身重 多眠睡 鼻息必鼾 語言難出 若被下者 小便不利 直視 失溲 若被火者 微發黃色 劇則如驚癎 時癎瘖 若火燻之 一逆尚引日 再逆促命期」

\*\*\*\* 陽明病六十六條「太陽病三日 發汗不解 蒸蒸發熱者 屬胃也 調胃承氣湯主之」

○溫病條列之太陽者、亦猶小柴胡之例、然其非表證、而敘在篇首者、豈叔和據五十八難、徒執其名、以與中風傷寒、相爲排比者歟、傷寒例第一節、辨列傷寒溫病暑病等、其意可知矣、愚固不欲議撰次之得失、特於此條、則不能無疑也、

○溫病條太陽病上六條之を太陽に列つらねるは、亦猶小柴胡の例太陽病中六十八條のごとし、然り其表證に非ざるに、敘するに篇首前部に在るは、豈叔和が五十八難難經に據より、徒に其名を執とり、以て中風傷寒と、相こもこも排比順序よく並べるを爲す者歟か、傷寒例第一節、列つらねて傷寒溫病暑病等を辨ずる、其意知るべし矣、愚固もとより王叔和の撰次の得失を議あげつらうするを欲せず、特ただ此條において、則ち疑無き能わず也、

其來必自太陽如少陽、

其來至必ず太陽如もしくは少陽自よりす、

其自少陽、所謂服柴胡湯已渴者、寓有其義、大抵白虎證、得之其人陽氣偶擾、而邪氣乘入、進勢殊急者、今多見之、經所云、恐其機也、然亦未能無因誤治而致者上也、

其少陽自よりし、謂う所\*「服柴胡湯已渴者」寓よせるに其義有り、大抵白虎證、之を得て其人陽氣偶たまたま擾みだれて、邪氣乘入、進すすむ勢殊ことに急なる者、今多く之を見る、經云う所、恐らく其機也、然れば亦未だ誤治に因りて致まねくす者無き能わざる也、

\* 太陽病中七十條「服柴胡湯已渴者 屬陽明也 以法治之」

而毒邪暴進、直陷入裏、内灼外熏、勢如燎原、故其脈浮滑洪大、

而して毒邪暴暴進、直に裏に陷入、内灼外熏、勢が原野原を燎焼・やくが如き、故に其\*脈浮滑洪大、

\* 太陽病下四十八條「傷寒脈浮滑 此表有熱 裏有寒 白虎湯主之」

太陽病上二十六條「服桂枝湯 大汗出後 大煩渴不解 脈洪大者 白虎加人參湯主之」

吳醫彙講、薛雪曰、傷寒脈浮滑、此表有熱、裏有寒、表之熱寒之用、裏之寒熱之體、言熱病本於寒、寒既病而爲熱矣、則體用皆熱也、漢之文法如此、是說蓋本諸方氏、又活人書、改作表裏有熱、而郭氏從之、汪氏亦曰、斯言乃爲定論、然未免臆見一、又黃氏據林氏、更更有詳論、文不錄、

吳醫彙講、薛雪曰く、「傷寒脈浮滑、此表有熱、裏有寒」表の熱は寒の用はたらき、裏の寒は熱の體本体、言いうころは熱病は寒を本とする、寒既つき病而すなわち熱を爲す矣、則ち體用事

物の本体とその作用皆熱也、漢の文法文章の法則此の如しと、是説蓋し諸方氏を本とす、又活人書、改めて表裏に熱有りを作りて、郭氏之に従う、汪氏亦曰く、斯言乃ち定論と爲す、然れども未だ臆見自分1人の考えを免れず、又黃氏は林氏に據より、變更に詳しい論有り、文録録するすさず、

其證、蒸蒸發熱、自汗出、心煩大渴、

其證、蒸蒸体内から蒸し立てられるが如く感ずる熱「傷寒論入門」發熱、自汗出、心煩大渴、

白虎加人參湯、及五苓散條、所<sub>レ</sub>言煩渴者、參<sub>二</sub>自餘諸條<sub>一</sub>、蓋煩而渴之謂、成氏以爲<sub>二</sub>熱渴<sub>一</sub>、似<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>妥、

白虎加人參湯、及び五苓散條、言う所の煩渴は、自餘ジョウ・このほか諸條を參せよ、蓋し煩而渴の謂、成氏以て渴と爲す、妥あらざるに似る、

舌上乾燥、欲<sub>レ</sub>飲<sub>二</sub>冷水<sub>一</sub>、然不<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>燥屎搏結<sub>一</sub>、唯是胃家焦燥、因立<sub>二</sub>白虎湯<sub>一</sub>、以清<sub>二</sub>涼之<sub>一</sub>、

\*舌上乾燥、冷水を飲まんと欲す、然れども燥屎大便搏結有らず、唯是胃家焦燥ショウシャク・やきとろかす、因つて白虎湯を立て、以て之を清涼す、

\*太陽病下四十條「傷寒病若吐若下後 七八日不解 熱結在裏 表裏俱熱 時時惡風 大渴 舌上乾燥而煩 欲飲水數升者 白虎加人參湯主之 方(知母 石膏 甘草 粳米)」

愚嘗謂此湯妙在<sub>二</sub>粳米<sub>一</sub>、何也、凡物不<sub>レ</sub>慣<sub>二</sub>于胃<sub>一</sub>者、金石爲<sub>レ</sub>最、物慣<sub>二</sub>于胃<sub>一</sub>者、莫<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>米穀<sub>一</sub>、今用<sub>二</sub>極不<sub>レ</sub>慣者<sub>一</sub>、故配以<sub>二</sub>極慣者<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>其不<sub>レ</sub>損<sub>二</sub>中土<sub>一</sub>、如<sub>二</sub>竹葉石膏湯桃花湯之粳米、厚朴麻黃湯之小麥、消石礬石散之大麥粥汁<sub>一</sub>、皆是也、詳義見<sub>二</sub>拙著藥治通義十卷<sub>一</sub>、又石膏一斤碎下、當<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>綿裹二字<sub>一</sub>、厥陰篇方中有<sub>レ</sub>之、陶隱居曰、凡湯酒膏中用<sub>二</sub>諸石<sub>一</sub>、皆細擣<sub>レ</sub>之如<sub>二</sub>粟米<sub>一</sub>、亦可<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>葛布<sub>一</sub>篩令<sub>レ</sub>調、並以<sub>二</sub>新綿<sub>一</sub>別裹内<sub>レ</sub>中

愚嘗謂おもうに此湯の妙は粳米に在る、何なんとなれば也、凡そ物で胃に慣れざる者、金石最いちばんと爲す、物で胃に慣れる者、米穀の如きはなし、今極めて慣れざる者を用いる、故に配するに極めて慣れる者を以てして、其中土胃「傷寒論攷注」を損なわしめず、竹葉石膏湯桃花湯の粳米、厚朴麻黃湯の小麥、消石礬石散の大麥粥汁の如き、皆是也、詳義は拙著藥治通義十卷を見よ、又石膏一斤碎下に、當に「綿裹つむ」二字を補うべし、厥陰篇方中に之有り、陶隱居陶弘景「本草經集注」曰く、凡そ湯酒膏中諸石を用いるに、皆細かく之を擣つくこと粟米ソクベイ・あわの如く、亦葛布くずの繊維で織った布を以て篩ふるい調そろうしめるべし、並みな新綿を以て別に裹つみ中に内いれると、

如其自<sub>二</sub>太陽誤汗吐下<sub>一</sub>、而加<sub>二</sub>液乏<sub>一</sub>者、加<sub>二</sub>人參<sub>一</sub>以滋<sub>二</sub>養之<sub>一</sub>、

如もし其太陽誤汗吐下に自よりて、液乏しき者に加足すするは、人參を加え以て之を滋養す、或曰、加人參湯證有<sub>レ</sub>二、其一、本方證、而變更液乏者、其一、液雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>乏、其病稍輕、不<sub>レ</sub>耐<sub>二</sub>本方<sub>一</sub>者、佐<sub>二</sub>人參<sub>一</sub>以調<sub>二</sub>停之<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>是否<sub>一</sub>、又千金外臺加人參諸條、一用<sub>二</sub>本湯<sub>一</sub>、恐非<sub>レ</sub>是、但白虎脈證、略<sub>二</sub>于本湯<sub>一</sub>、而反詳<sub>二</sub>于加人參湯<sub>一</sub>、殆不<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>疑也、

或いは曰く、加人參湯證に二有り、其一、本方證白虎湯證にして、變更に液乏しき者、其一、液乏しからず、其病稍輕きと雖も、本方に耐えざる者、人參を佐たすけとして以て之を調停和

解させるす、未だ是否を知らず、又千金\*外臺加人參諸條、一に本湯を用いる、恐らく是に非ず、但白虎脈證、本湯を略して、反って加人參湯に詳しいは、殆<sup>おそらく</sup>疑い無きにあらず也、

\*太陽病下四十條「傷寒若吐若下後 七八日不解 熱結在裏 表裏俱熱 時時惡風 大渴舌上乾燥而煩 欲飲水數升者 白虎加人參湯主之 方 知母六兩 石膏一斤 甘草二兩 炙 人參二兩 粳米六合

右五味 以水一斗煮米熟 湯成去滓 溫服一升 日三服 此方立夏後立秋前乃可服 立秋後不可服 正月二月尚凜冷 亦不可與服之 與之則嘔利而腹痛 諸亡血虛家亦不可與 得之則腹痛利者 但可溫之 當愈」

千金方卷九傷寒上「傷寒若吐若下後 七八日不解 熱結在裏 表裏俱熱 時時惡風 大渴舌上乾燥而煩 欲飲水數升者 宜白虎湯方」

参考 太陽病下四十條の傷寒論攷注の案文

案ずるに此の條の方劑、傷寒論の汗吐下後篇・玉函經・千金翼は加人參湯と作る、而<sup>しかる</sup>に脈經・千金方・外臺引千金翼・醫心方引千金共に白虎湯と作り、加人參三字无<sup>なし</sup>し、此に据<sup>よ</sup>れば則ち此の條蓋し白虎湯本條と為さん、故<sup>ことさら</sup>に方後立夏後云云に加人參の語に關<sup>関</sup>せず也、宜しく脈經千金等に從い之を正すべき也、凡そ白虎湯と云つて、加人參の方亦之を兼言する者、柴胡桂薑亦之を小柴胡湯と謂い（外臺一ノ十一）三承氣亦單に之を承氣と謂う例耳、

○太陽上篇加人參條、汪氏曰、此條當<sub>下</sub>是太陽證罷、轉屬<sub>下</sub>陽明<sub>上</sub>之證<sub>上</sub>、其不<sub>レ</sub>入<sub>下</sub>陽明篇<sub>上</sub>者、以其服<sub>下</sub>桂枝湯<sub>上</sub>後之變證、且與<sub>下</sub>上條<sub>上</sub>、脈證相同、但加<sub>下</sub>煩渴<sub>上</sub>、用<sub>レ</sub>藥霄壤、前賢著<sub>レ</sub>書、欲<sub>レ</sub>使<sub>下</sub>後學悉<sub>レ</sub>心體認<sub>上</sub>、

○太陽上篇加人參條\*、汪氏曰く、此條當に是太陽證罷<sup>やみ</sup>、陽明に轉屬するの證なるべし、其陽明篇に入れざるは、以て其桂枝湯を服した後の變證、且つ上條\*\*と、脈證相同、但し煩渴を加える、用藥に霄壤<sup>ショウジョウ・雲泥・天と地がへだたるように大差がある</sup>、前賢<sup>前代の賢人</sup>書を著<sup>書き</sup>あらわすし、後學<sup>後進の學者</sup>に心を悉<sup>つく</sup>くし體認<sup>十分に會得すること</sup>せしめんと欲す、

\*太陽病上二十六條「服桂枝湯 大汗出後 大煩渴不解 脈洪大者 白虎加人參湯主之」

\*\*太陽病上二十五條「服桂枝湯 大汗出 脈洪大者 與桂枝湯如前法 若形似瘧 一日再發者 汗出必解 宜桂枝二麻黃一湯」

設其失<sub>レ</sub>治、則胃津枯竭、遂不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>救、其變或爲<sub>下</sub>胃實<sub>上</sub>、而不<sub>レ</sub>敢<sub>下</sub>爲<sub>下</sub>陰證<sub>上</sub>也、  
設もし其治を失<sup>あやま</sup>てば、則ち胃津枯竭<sup>コケツ・尽きる</sup>、遂に救うべからず、其變或いは胃實を爲して、敢えて陰證を爲さざる也、

白虎承氣之別、在<sub>下</sub>實之有無<sub>上</sub>、則似<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>宜<sub>下</sub>變爲<sub>下</sub>彼證<sub>上</sub>、然在<sub>レ</sub>今驗<sub>レ</sub>之、往往有<sub>レ</sub>之、況三陽合病、既有<sub>下</sub>腹滿讖語<sub>上</sub>、則其理可<sub>レ</sub>見也、

白虎承氣の別、實の有無に在れば、則ち宜しく變わり彼證と爲すべからざるに似る、然して今に在って之を驗<sup>ため</sup>すに、往往之れ有り、況<sup>い</sup>わんや三陽合病\*、既に腹滿讖語有れば、則ち其理見るべき也、

\*陽明病四十條「三陽合病 腹滿身重難以轉側 口不仁 面垢 又作枯 一云向經 讖語 遺尿 發汗則讖語 下之則額上生汗 手足逆冷 若自汗出者 白虎湯主之」

風溫者、溫病之類證也、據<sub>下</sub>脈陰陽俱浮<sub>上</sub>、則似<sub>下</sub>表有<sub>レ</sub>邪者<sub>上</sub>、其證與<sub>下</sub>三陽合病<sub>上</sub>相近、治法亦恐白虎所<sub>レ</sub>宜也、

風溫は、溫病の類證也、脈陰陽俱浮\*に據れば、則ち表に邪有る者に似る、其證三陽合

病\*\*と相近く、治法亦恐らく白虎の宜しき所也、

\*太陽病上六條「太陽病 發熱而渴 不惡寒者 為溫病 若發汗已 身灼熱者 名風溫 風溫為病 脈陰陽俱浮 自汗出 身重 多眠睡 鼻息必鼾 語言難出 若被下者 小便不利 直視 失溲 若被火者 微發黃色 劇則如驚癇 時痲癢 若火燻之 一逆尚引日 再逆促命期」

\*\*陽明病四十條「三陽合病 腹滿 身重 難以轉側 口不仁 面垢 譫語 遺尿 發汗 則譫語 下之 則額上生汗 手足逆冷若 自汗出者 白虎湯主之」

此條難解、程氏注於「文理」為順、然愚竊有疑、何則表裏熱盛、倘誤汗之、必大傷津、恐不更至陰陽俱浮也、成氏以為傷寒發汗之後、方知其風溫、是似於「病理」為順、今就其義、別發一說、此言太陽病發汗、當解不解者、不特表有邪、而裏既有熱、其稱之風者、猶風家風濕之風、即表有邪之謂、然則風溫為溫病之兼表者、故一條中併論之、然不啻汗後知之、自有認得眞的、故下文先揭「風溫為病」一句、而盡其證、若被下、若被火、從程氏、則是係溫病誤治、從成氏、則是係風溫誤治、未審何是、又成氏曰、先曾被火為一逆、若更以火熏之、是再逆也、蓋本于玉函、程氏則以「若火熏之」、謬為體如煙熏、故以一逆再逆、為汗下等之誤治、又汪氏疑「小僂便不利」字、然太陽中篇、有「欲小僂不得、反嘔欲失溲」之文、蓋同例也、又此病、謂與三陽合病相近者、何也、彼曰「脈浮大上關上」、此曰「脈陰陽俱浮」、彼曰「若自汗出者」、又曰「目合則汗」、此曰「自汗出、彼曰「身重難以轉側」、此曰「身重」、彼曰「但欲眠睡」、此曰「多眠睡鼻息必鼾」、彼曰「口不仁」、此曰「語言難出」、彼曰「遺溺」、此被下曰「失溲」、但彼兼胃實、故有「腹滿譫語」、其他則證證相合如此、殆一病而異其名者耳、義出蠹見、姑錄俟識者、

此條太陽病上六條難解、程氏注は文理条理・すじみちに於いて順道理にかなうと爲す、然れども愚竊竊かに疑うたが有り、何なんとなれば則ち表裏熱盛、倘もし誤って之を汗するに、必ず大いに津を傷り、恐らく更更に陰陽俱浮には至らざる也、成氏「傷寒發汗已則身涼若發汗已身灼熱者非傷寒為風溫也」以て傷寒發汗の後、方まさに其風溫を知ると爲す、是病理に於いて順と爲すに似る、今其義に就いて、\*別に一説を發あらわす、此太陽病汗を發し、當に解すべきに解ざる者、特に表は邪有らざるにして、裏既に熱有るを言う、其之を風と稱する者、猶風家風濕の風ごとし、即ち表に邪有るの謂、然れば則ち風溫を溫病の表を兼ねる者と爲す、故に一條中併あわせて之を論ずる、然してただ汗後之を知らず、自ら認得知る・わかる・認める眞的眞実有り、故に下文先ず「風溫為病」の一句を掲げて、其證を盡くす、太陽病上六條「若被下・・若被火・・」程氏に従よれば、則ち是溫病の誤治に係つながる、成氏に従れば、則ち是風溫の誤治に係がる、未だ何いれを是とするか審つまびらかならず、又成氏曰く、先ず曾かつて「被火」一逆と爲す、若し更更にに火を以て之を熏くすべし、是「再逆」也、蓋し玉函「復以火熏之」を本元とする、程氏則ち「若火熏之」を以て、謬あやまって體に煙熏の如きを爲す、故に一逆再逆を以て、汗下等の誤治と爲す、又汪氏「小僂便不利」の字を疑う、然れば太陽中篇\*\*「欲小僂便不得、反嘔欲失溲シツシュウ・失禁・・」の文有り、蓋し同例也、又此病、三陽合病と相近い者と謂う、何となれば也、彼\*\*\*「脈浮大上關上」と曰い、此太陽病上六條「脈陰陽俱浮」と曰う、彼「若自汗出者」

と曰う、又「目合則汗」と曰う、此「自汗出」と曰う、彼「身重難以轉側」と曰う、此「身重」と曰う、彼「但欲眠睡」と曰う、此「多眠睡、鼻息必鼾<sup>いびき</sup>」と曰う、彼「口不仁」と曰う、此「語言難出」と曰う、彼「遺溺<sup>尿</sup>」と曰う、此下せ被<sup>ら</sup>れ「失溲」と曰う、但彼胃實を兼ねる、故に「腹滿、讖語」有り、其他則ち證證相合うこと此の如し、殆んど一病にて其名を異にする者耳、義は蠡<sup>レイ・ひさごの半分・小さい</sup>見<sup>謙遜</sup>に出<sup>う</sup>まれるる、姑<sup>しば</sup>らく録して識者<sup>識見ある人</sup>を俟<sup>まつ</sup>、

\* 「別發一説・・・盡其證」までを傷寒論攷注では太陽病上六條の「若發汗已 身灼熱者 名風溫」文下に引用

\*\* 太陽病中八十四條「太陽病二日 反躁凡熨其背 而大汗出 大熱入胃 胃中水竭 躁煩 必發讖語 十餘日振慄自下利者 此為欲解也 故其汗從腰以下不得汗 欲小便不得 反嘔 欲失溲 足下惡風 大便鞭 小便當數而反不數 及不多 大便已頭卓然而痛 其人足心必熱 穀氣下流故也」

\*\*\* 以下の彼は三陽合病の以下の條、此は太陽病上六條。

少陽病五條「三陽合病 脈浮大上関上 但欲眠睡 目合則汗」

陽明病四十條「三陽合病 腹滿身重難以轉側 口不仁 面垢 又作枯 一云向経 讖語 遺尿 發汗則讖語 下之則額上生汗 手足逆冷 若自汗出者 白虎湯主之」

○總病論、病人素傷<sub>二</sub>于風<sub>一</sub>至<sub>二</sub>醫殺<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>之耳、本出<sub>二</sub>玉函脈經不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>汗病中<sub>一</sub>、風溫之爲<sub>レ</sub>病云云、全取<sub>二</sub>千金方<sub>一</sub>、但千金、作<sub>二</sub>溫風之病<sub>一</sub>、溫風二字蓋錯、

○總病論、病人素<sup>もと</sup>と風に傷<sup>やぶ</sup>られ醫之を殺<sup>おとろえ</sup>すに至る耳、本玉函・脈經・不可發汗病中に出る、風溫之爲病云云、全て千金方に取る、但千金、溫風之病と作<sup>な</sup>す、溫風二字蓋し錯<sup>まちが</sup>える、

完 2010/01/29